〈2科型〉

二〇二五年度

適性検査Ⅰ

注　意

1　問題は **1** のみで、**5ページ**にわたって印刷してあります。
2　検査時間は**四十五分間**です。
3　声を出して読んではいけません。
4　答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5　答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
6　**受験番号・氏名**を問題用紙と解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

聖徳学園中学校

受験番号					

氏　名

1　次の〔文章1〕と〔文章2〕を読み、あとの問いに答えなさい。（※印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

〔文章1〕

嘉穂は、友人であるひとみにさそわれて、音楽教室を訪ねたところ、音楽教室の先生である後藤先生の指揮で歌うことになった。

嘉穂は体を丸めるようにして立った。肩に力が入っている。

後藤先生の目が嘉穂の頭の先からつま先まで、視線を走らせた。試すような視線に、嘉穂はぞくっとした。

ぽーんとピアノの音が聴こえた。

「ちょっと、声だしてみようよ」

後藤先生は有無を言わさない口調で言う。

嘉穂は完全に戸惑っていた。それを見て先生が言いかえた。

「そっか……。じゃ、息を吸ってみて」

嘉穂は言われたとおりに吸いこんだ。お腹をぱんぱんにふくらませる。別にヨガの真似事をしているわけではない。意識して呼吸をしたら、こうなってしまった。

息が乱れているのが自分でもよくわかる。何回も先生は息を吸ってと声をかけてくる。そのうち、吐く息が一定になってくる。姿勢がしゃんとしてくる。この頃、グラウンドでもそうなのだが、息が整ってくると、どうしても声をだしたくなってくる。

でもここは、グラウンドじゃない。風が吹かない。だから、声をどこに向けたらよいのかわからない。ピアノの音には声をのせたことがない。

突然、嘉穂の視界の中に先生の細い指が現れた。

その時、部屋の中の空気がふっと動いた。

先生が、そっと空気の層を一枚めくるように、人差し指と親指でつまむしぐさをする。

嘉穂は息を鼻から吸った。そして、そのつまんだ指の方向に、そっと声を届けた。ピアノの前にいる先生にプレゼントを差しだすように、おずおずと。

先生がうなずきながら指を軽く開いて、上に向ける。

嘉穂はそれに声をのせる。まだ、生の声だ。

声がひっくり返る。

てのひらが上下し、少しずつ上昇していく。どんな声をだせばいいのかなんて考える余裕がない。勝手にでてくる声、そのままだ。グラウンドでの声がかぼそいながら吐く息といっしょにでてゆく。

突然、くるくると指がまわりだした。嘉穂の声がころころと転がる。※キャンの喜ぶ姿が頭をよぎった。

嘉穂の頭が真空になった。ただ先生の動かす指と、自分のだす声のことしかなかった。

嘉穂は先生の指に魅入られたように、声をだし続ける。とても気持ちがいい。たくさん声をだしたくなってくる。するとそれがわかるの

か、先生は両手で持ちあげるようなしぐさをする。それに勢いづいて声をだす。お腹に力をこめ、口を大きく開く。びりびりとした声で頭の中がしびれる。小さな声でそっと歌いたくなると、動きも小さくなり、てのひらがすぼまる。

まるで、嘉穂の気持ちがわかるかのようだ。

あーとも、おーともつかない歌詞の無い歌を歌い続ける。

少し疲れたと思ったとき、上をむいたてのひらが坂をのぼるようにあがっていく。嘉穂はついていった。どこまで声がでるのだろう。

そして驚いた。ひりひりとするような硬質な声がのどの奥から、体の芯からでてゆく。消えゆくような高音の声が部屋に響いた。

先生が指を閉じて、遠くに音を投げるような振りをした。嘉穂はそのまま、音を遠くにあずけた。

フー。体から力と空気が一気に抜けていった。体が汗ばんでいる。両足に力が入っていたのか、おもわずつんのめりそうになった。

先生が嘉穂を見ている。

見返した。

先生は怒っているとも、驚いているともつかない表情をしている。

突然、ひとみが手をたたいた。

「す、すっごい。嘉穂、上手、きれい、すごい！」

イスから飛びあがって抱きついてくる。

嘉穂は思わずよろめいた。

「うん。レッスンはこんな感じでやる。で、もし、やりたかったら連絡ちょうだい」

なんだかひどくそっけない言い方だった。

嘉穂はわれに返り、ひとみといっしょにあいさつをした。

部屋をでようとドアを見た。そして、気がついた。ほんの少し開いている。歌いはじめたときに感じた空気の動きは、きっとすきま風だったんだろう。

でも不思議だった。先生がきちんとしめたはずなのに。

帰り道、ひとみは興奮状態だった。後藤先生が気にいっただとか、嘉穂の歌声がすごかっただとか、※後藤がでてくればよかっただとか、次々に言葉がでてきていた。

嘉穂は生返事を繰り返した。さっきの声はグラウンドで歌うのとはどこか微妙に違っていた。外では自分の声が風に乗って、ひろがっていくのがとても心地よかった。でも、さっきの声は壁にはね返されて自分の耳にもどってきた。いいとか悪いとかはわからないけれど、あれが嘉穂の声なのだ。

歌い終わった今は、体の中を風が吹き抜けていく。頭の中も空っぽだった。両腕をのばし、気持ちいい！　と叫びだしたいほどだった。

（にしがきようこ「ピアチェーレ　風の歌声」による）

〔注〕

※キャン――――嘉穂が飼っている犬。

※後藤――――後藤先生の子どもで、嘉穂とひとみのクラスメート。

〔文章２〕

高校生の「僕」は幼いころからバイオリンを習っており、オーケストラ部でもバイオリンを担当している。オーケストラ部は、新入部員を増やすため、正門前で演奏することになった。

石畳を行き過ぎようとしていた人達の足が止まり、立ち止まって聴いていた人達は「ああ、この曲……」というようにうなずいている。曲目は『威風堂々・第一番』。今の人数では編成的にツラいけど、やっぱり一曲目を有名な曲にして正解だった。

※コンサートマスターのすぐ後ろの席から見ていると、石畳から少し芝生に踏み出した人達を前列に、だんだん人垣ができ始めていた。

真っ先に立ち止まった最前列の中でも、いちばんノリノリで聴いているのは※葵だった。自然とリズムに乗ってしまうのか、それとも松代部長のまねをしているのか、爪先立つようにして指揮者みたいに両手を振り回している。その後ろでは、※廉太郎がまじめな顔で腕組みしながら聴いていた。

葵が妙なパフォーマンスをしているせいもあってか、どんどん女子の観客が増えていく。

予想以上の大盛況に高揚していく※オケ全体の雰囲気とは逆に、僕個人的な演奏クオリティとしては最悪の状態にあった。

絆創膏を貼ってはいるが、左手の甲の、ちょうど指の付け根あたりを横一直線に擦り剝いた傷がじわじわと痛む。いや、痛みだけなら我慢するのだが、絆創膏のガーゼ面と擦り剝けた皮膚がひっついて固まり引き攣れているせいで、指が思うように動かないのだ。

バイオリンを習い始めてから約十年、小さなコンクールでは入賞経験もある。中等部入学当初から、高等部の先輩を差し置いて、ずっと※ファーストバイオリンを弾き続けてきた。

なのに！　新入部員勧誘の大事なコンサートなのに、こんなぶざまな演奏しかできないなんて！

歯を食いしばりながら、最後の曲『ファランドール』の速いテンポに必死でついていく。

チラッと見えた廉太郎の顔が、なんだか心配そうに見えて、眉間に寄せたシワが深くなる。

たぶん、廉太郎にはわかるのだろう。怪我のせいで上手く指が動かないことも、上手くいかないことに焦って、技術面だけでなく曲に込めなきゃいけない心まで失っていく、僕の弱さも。

こんなとき、「なんでそんなじっと見てんねん！」「はよ、帰ってまえ」「お前なんかに心配されたないわ！」等々、逆ギレ同然の気持ちしか湧いてこない自分の心の弱さに、また腹が立つ。

思わず泣きそうになってしまったそのとき、人垣の前列がいっそうざわついてきているのに気づいた。

じっと曲を聴いている人垣の前で、誰か一人だけ異質な動きをしている。

前列の奴らが半円形に後ずさって距離を取っている、その真ん中で、葵が踊っていた。

『ファランドール』の後半、フルートのメロディーとタンバリンのリズムに乗って、軽やかなステップを踏んでいるのだ。

ときどき、芝生の上で垂直に飛び上がったりもして、そのたびに観ている生徒達の間から歓声があがっている。よくわからないけど、三回転ぐらいしてるんじゃないだろうか。

いつの間にか、目の前にある楽譜や、痛んでいた手の怪我から注意がそれていく。意識の中にあるのは、自分の奏でている音とぴったり調和している、葵の踊りだけになっていた。

自分でも知らないうちに、僕は、飛び跳ねる葵を支える音になりたいと思いながら、バイオリンを弾いていた。すると、譜面づらだけを追っていたときよりも、音に力がこもってくるような気がした。

芝生を囲む人垣の向こうに、何千人もの観客が見えてくる。それは、ちっぽけな部活のコンサートなんかじゃなくて、何か大きなイベントで、僕の音に合わせて葵が踊っているという妄想だった。

今まで、コンクールでもコンサートでも、誰かに自分を見られている、自分の音を聴かれていると思うだけでプレッシャーを感じ、思いどおりに弾けなくなることが多かったけれど。

今の僕には、自分の奏でる音楽と葵の演技に大勢の人達が熱狂している――そんな妄想も、逆に音に勢いをつけてくれる要因になっていた。

いつの間にか僕は、手の甲の痛みも指の引き攣れも忘れて、久しぶりにバイオリンを弾くことを「楽しい」と感じながら、音を奏で続けていたのだった。

（風野潮「レントゲン」による）

〔注〕

※コンサートマスター――演奏者のまとめ役。

※葵――「僕」の同級生で、フィギュアスケーター。

※廉太郎――「僕」の兄。

※オケ――オーケストラの略。

※ファーストバイオリン――バイオリンの高音域のメロディの担当。

〔問題1〕**〔文章1〕**に「嘉穂は生返事を繰り返した」とあるが、嘉穂がこのような反応をしたのはなぜか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

〔問題2〕**〔文章2〕**に「意識の中にあるのは、自分の奏でている音とぴったり調和している、葵の踊りだけになっていた」とあるが、このことによって、「僕」は、どのように演奏できるようになったか。以前のコンサートやコンクールでの「僕」の様子と比かくしながら、以下の空らんにあてはまるように五十字以上五十五字以内で説明しなさい。

今までは［　　］ようになった。

〔問題3〕あなたは、自分の実力を思う存分発揮するためには、どのようなことが大切だと考えますか。**〔文章1〕〔文章2〕**の内容をふまえて、三百六十字以上四百字以内で、具体例を挙げて説明しなさい。

〈きまり〉

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○段落を設けず、一ますめから書きなさい。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。

○。と」が続く場合には、同じますめに書きます。この場合、。」で一字と数えます。

解答用紙

適性検査Ⅰ

氏　名

受　験　番　号

得　　点

※

※のらんには何も記入しないこと。

〔問題1〕

50

60

〔問題2〕

今までは

50

55

ようになった。

〔問題3〕

400　360　300　200　100　20

〈２科型〉